

(3) ㊦ 氷 氷 (アキニ)

イ、原文 (㊦ 开 糸・ヲ シテ 表記)

㊦ 氷 氷

㊦ 氷 氷 ㊦ 氷 氷

㊦ 氷 氷 ㊦ 氷 氷 ㊦ 氷 氷

㊦ 氷 氷 ㊦ 氷 氷

氷 氷 氷

ロ、カナ表記

アキニ

アキニトハ コチニヒ

モトケ ツミノガル ツグ

ミココロノ ハルゾキ

ニケル

ハ、直訳文 (現在語表記)

アキニ

アキニとは 東風に氷

も融け

罪免る

嗣ぐ

御心の

春ぞ来

にける

二、解説

アキニとは、天成り道を暗示する占いです。

アキニとは、政が滞ると厳冬時に水が氷になるように荒れるものです。治世が良くなると、春、東から吹く風に、氷も融けるように世も平穏になります。そして、新たなアマカミ(天神)は、タミ(民)が昔に侵した罪や悪しき身をも免せるものです。これも新たに天日嗣ぐ、アマカミ(天神)の御心の賜物となります。この国に御心と云う東風が来て、やっと、春ぞ来るにける(春がやっと来ることでしょう。)

(補足説明・アキニを紐解く鍵)

アキニを解説するヒントは、「タミ(民)疲れなし」にありました。この「タミ(民)疲れなし」には、特別の意味があるのかと思ひ、ホツマツタエを読みますと、21アヤ(綾)31、32に「民のから枯れ あらじなと 長が奢れば 民疲る 疲れて業も から枯れと 訴ふ時に 戒めて 国お治さねば」の文章がありました。すでにお気付きのことと思ひますが、「タミ(民)疲れなし」は、「長」「アマカミ(天神)」の国を治める善し悪しに起因するようです。このことから、テルヒコが葦原国に降されて、どのような政を行ったかが想像させられ、20アヤ(綾)を読みますとより実感が湧いて来るようです。

20アヤ(綾)の概略

26鈴16枝41穂(紀元前280年)頃の話です。アマテル神より日嗣された長男のオシホミミの世も、天照らす頃になり、年老いた春日(殿)より政り事を休む申し出がありました。その頃、葦原国の香久山命より申し出を聞き入れられたオシホミミは「自ら葦原国を治めんと準備をされていた。そのことを聞き付けたタミ(民)が集まって、オシホミミに懇願し葦原行きを思い留まって頂くことになりました。その変わり、香久山命の願い入れ「皇子のテルヒコ」を葦原国に降ろすことで、伊勢の大御神の御許も頂けました。テルヒコが、十種宝、振る

祈詩を賜われる頃になると、テルヒコの葦原国への進出に対し中国神が拒む話もあり、父オシホミミは、中国神の反対を防ぐため、伴神の総勢32人を騎馬で葦原国の守りに行かせることにしました。更に、皇子テルヒコの八房の行幸車には、五伴の守る造の五人を当たらせました。大物主は五組の物部二十五を率き添えて、伴人総てで八百六十四人が、日高見を出発され鹿島宮に入られました。その頃、伊勢に待たれていたテルヒコ皇子の弟のキヨヒトに、神(アマテル神)より勅がありました。今、テルヒコの皇子が鹿島宮に入ったので、「キヨヒトとタチカラオは早船で行き、沖に係留している岩楠船で進むべし(進んで下さい)」。その言葉よりに皇孫(キヨヒト)とタチカラオは、ワニ船に乗りて、上総(千葉県)の九十九にお着きになって、その足で香取宮に入られました。

早速、キヨヒトは、兄のテルヒコに、アマテル神の勅を報告されました。「神こと(アマテル神)が宣れ(口に出して云われることに)は、葦原国に降ろすホノアカリ(テルヒコ)の行く末が心配である。八代目のオオヤマスミ(カグヤマオキミ)の五子のマウラお(を)召して、占ってくれ」と申されました。占問えは(その結果)、マウラが占ったフトマニの掛は、「アキニ」取ると出て、その意味は、「東風に氷も融け 罪免る 今春なれば 西の空 タミ(民)疲れなし吉々」と出ました。これで、アマテル神の勅が定まりました(る)。この後、日高見のオシホミミに会われて、フトマニの掛が良かったことを報告されたのでした。